

住民参加による地域資源再評価活動

——『写真集 モノクロームヤマシナ』の企画・制作活動とその評価——

木 下 達 文

1. はじめに

京都橋大学文化政策学部では、学部が設立された2001年度より、自治体(京都市山科区)と大学との地域連携活動を進めてきている。具体的には、受託研究として、『京都市山科区ガイドマップ』の制作(2001年度)、『Let's Walk やましな ホップ・ステップ・マップ』の制作(2002～2003年度)があり、それぞれのプロジェクトの内容および評価については、「視覚情報メディアとしての『地図』——『京都市山科区ガイドマップ』における市民参加型企画・制作システムとその効果——¹⁾」および「視覚情報メディアとしての『地図』(2)——『Let's Walk やましな ホップ・ステップ・マップ』企画・制作における市民参加型地域資源再評価活動とその効果——²⁾」としてとりまとめている。また、学部全体の取り組みとしての途中経過については、2004年に発行された『文化開発の可能性——コラボレートする山科からの提案——³⁾』に詳細に記述してあるので、そちらを参考されたい。

地域資源再評価という意味で、上記2つのプロジェクトの概要を記すならば、2001年度(初年度)の事業が、「行政地図」を企画・制作する過程において市民参画を行った最初のものであり、試行錯誤の中で連携事業の在り方を考えたものであった。2回目の「ホップ・ステップ・マップ」では、1回目の反省を踏まえ、2カ年に渡る継続事業とする中で、より詳細なフィールドワークに基づく地域資源(地域の新しい「宝もの」)の発掘とその評価を基にした「ウォーキングマップ」の制作を、区民・学生と協働しながら進めていったのものであった。この2回の連携事業を通じて、大学が仲介をしていくいわゆる「GDS モデル⁴⁾」の効果を改めて認識することができている。つまり、アンケート評価等で

も、アウトプットされるツールのプラス評価が常に98%以上であり、市民参画事業の効果的なモデル実践例としては高い効果を示しているという結果となった。

本稿では、引き続き大学の地域連携の一環として、2004年度から2005年度にかけて実施されたプログラム「写真集『モノクロームヤマシナ』」企画・制作プロジェクトについて言及することとしたい。以下では、プロジェクトの企画・制作のコンセプトやそのプロセスについて、コーディネーターの視点から検証する中で、地域資源の再評価活動の意味、あるいは調べ上げた地域情報を伝達するためのメディアとしての「写真集」の意味を考える。あわせて、成果物の利用状況を把握するためにできうる範囲での利用者アンケートを実施し、その評価と分析を行った。本稿が今後の市民参加研究や地域資源再評価活動ならびに、視覚情報メディア研究等の一助となることを願う次第である。

2. 市民参加による地域資源の再評価と写真収集・写真集制作

(1) プロジェクトの目的とその意義

○「写真で語る山科の今・昔」

2004年度は、プロジェクトの企画母体となる京都市山科区役所区民部地域振興課が、大きく組織変革をした。名称もまちづくり推進課となり、その役割もかなり明確となった。また2006年が山科区誕生30周年ということもあり、なんとか山科の環境をふりかえることができないかということで、「単なる過去の資料をまとめる市史編纂などということではなく、より多くの人が山科の過去を振り返られるものがないのではないか」という区役所側の提案がなされた。それを受け、できるだけ目で見て分かるツール制作をするということで、「写真」というテーマが浮上してきたのである。その背景的な意味においては、これまでのマッププロジェクトにおいて何度も不便を感じたこととして、山科の写真資料が公的機関等にまとめて保管されていなかったこともあり、過去の事象を視覚的に確認することになり困難を極めたという経験があった。地図をつくるだけでなく、今後のまちづくりを考える意味でも、過去の状況をきちんと把握しておくことは非常に大切な作業である。

われわれが2001年から地域振興に関わりはじめた段階では十分な資料がなかったため、今後まちづくりを本格的に推進していく上においてもビジュアル資料抜きに基礎的な作業をしていくのは難しく、その意味において山科地域の古い写真を収集していくことに対して大変意義のあることだと考えたのである。本来、まちの過去をきちんと知ることのできるミュージアム機能が欲しいところではあるが、近年の財政状況ではすぐに実現することは難しい。

そこで、区民の協力を得て、可能な範囲でそうした写真情報の概括的な収集と、広く山科の過去と現在を認知してもらうためのツールづくりとしての「写真で語る山科の今・昔(仮称)」プロジェクトが2004年11月よりスタートしたのである。まず、その前月の10月より区民公募と大学公募による25名からなる委員会が組織され、名称も「パッチリ山科みつ隊」と命名された。組織自体も想像以上に大きくなったため、初年度は主に対象把握と活動の方法論を参加者同士で決めていくことが中心となった。過去のプロジェクトに参加したメンバーと新規に参加したメンバーとが混在していたため、目的意識にかなりのばらつきが感じられ、その意識の溝をできるだけ丁寧に埋めていくことが重要な課題となった。

こうした経緯を踏まえ、単に過去を振り返るということに留まらず、過去の中から現在見失っているものを発見したり、そこから未来のまちづくりに発展できうる要素を見つけたするための資料収集プロジェクトの位置づけを明確にし、事業の展開をはかっている。加えて、これは写真収集活動を通して分かったことであるが、必ずしもこちらが意図しているような写真が見つかることが少なかったため、このプロジェクトを通して、後世に語りついでいくための現代の写真を残していくことも目的の中に含まれている。これから先の30年、あるいは50年後の山科と比較ができるように、撮影を行った場所を明らかにしておくことで、後の定点観測を可能としている。

(2) 地域資源再評価と地図の企画・制作のプロセス

○住民参加による地域資源再評価活動——身近なものを再発見する——

プロジェクト推進にあたっては、これまでのプロジェクトの経緯から、活動期間を2カ年という年度をまたがって実施することとした。前回の「ホップ・

ステップ・マップ」から、市民参加型事業において単年度で実施するのは時間的に困難であるという見解に基づき実施してきたのがその理由である。ただ、これが思わぬデメリットを生む結果ともなった。その点については、次の組織の項で触れておきたい。

次に、今回も成果イメージを最初から決めずに、まずは地域研究会的な活動から参加者の意志疎通を図ることから実施し、また写真資料の提供を呼びかけ、収集した資料を丁寧に観察するところから進めていった。原則的には、集まった写真をカード化し、そのカード資料集を報告書としてまとめることを目指した。ところが、事項で述べるように、参加者の意向により最終的な成果の方向性が変化し、「写真資料集」から、一般向けの「写真集」と「資料編」そして「データカード」という3種類のアウトプットを制作するという結果になった。ここで取り上げるのは主に「写真集」の企画・プロセスということになる。

○組織構成について

組織の運営はこれまでのプロジェクトを踏襲し、区民、学生、行政、教員からなる組織をつくって「委員会」方式をとることとなった。区民については、行政の発行する「市民しんぶん山科区版」（平成16年10月15日発行）によって広く区民に呼びかけることによって希望者を集めることとし、学生については、筆者が京都橘女子大学(当時)の学生に個別に調整することで参加者を募った。コーディネーターとしては年齢や性別があまり偏ることなく、多様な視点を成果に反映できることを狙って調整を行った。

市民しんぶんでの応募者が9名であり、うち5名は前年度の事業から継続参加であった。一方、大学の方では12名の参加者があり、うち1名は前年度の事業から継続参加であった。事務局側では、アドバイザーとして山科の歴史を知る会代表の山本正明氏にお願いし、その他区役所関係者が3名、大学関係者が筆者を含めて3名が参加し、総勢28名となった。そして、組織名称は「パッチリ山科見つけ隊」と命名された。

組織的には、人数が比較的多く、途中から学生の参加も卒業などをする学生も含めて半数程度となった。また、公募市民の中にはかなり自発的な人も多く、活発な意見交換をすることができる一方、山科を知る人と知らない人の溝が深

く、最後まで学生の参加や意見集約に課題を残した結果となった。しかし、後半にはお互いに補完し合う行動も見られるようになり、歴史的背景や年齢の異なる組織を組むことの意義を改めて感じた次第である。

一方、最も大きな組織上の課題として、事務局の母体となるまちづくり推進課の人事異動の問題があった。2年度にまたがる継続事業ということにもかかわらず、2005年4月に担当者が全員異動という事態となった。当然、プロジェクトはしばらく休止せざるを得ない結果となり、とくに積極的な参加者から不満の声が続出した。この事に対して、①お互いが納得いくまで話し合ったこと、②これまでの課題を全てさらけ出し成果の方向性についても話し合いで修正していったこと、で乗り切っていった。一時は非常に苦しい時期もあったが、コミュニケーションを密にとることで、より強固な組織となることができたように感じる。この時点でコーディネーターとしての手腕も問われることとなったが、人事のあり方については課題が残る結果となった。今後、とくにまちづくり行政における人事異動については、ダブルシフトなりトリプルシフトが望ましい。つまり全員を入れ替えるのではなく、糸の切れない人材の配置をしておかないと、ネットワークの喪失と信頼性の崩壊に繋がる。この点については、今後の行政施策にも関わることとなるので、あえてここに提言をしておきたい。

最後に、写真集の編集・制作においてはデザイナーに依頼することはなかった。というのは、参加者の中に編集実務経験者が含まれていた関係で、今プロジェクトではその方に全面的にお願いすることとなり、結果的には版下作成の段階までを手がけることとなった。

○会議および委員会(ワークショップ)等の運営

前にも述べたが、プロジェクト当初は写真収集と整理が目的であったが、年度がかわり、組織が大きく変化した中で、その方向性も一般向けの「写真集」を制作するという方向に変化をしていった。事務局としては当然最終的な何らかの報告書をつくる予定にはしていたが、参加者の多くは、最初からゴールを明確にして活動に入りたいと願う人も少なくなく、その部分での調整が今回のプロジェクトでは比較的難しかったように感じる。本来、ボランティア活動は「仕事」ではないので、もう少し自由な発想で活動をとらえてほしかったとい

うコーディネーターの思いがなかなか届かなかったのが残念でもある。

プロジェクトの運営は、大きく事前の調整会議と委員会(ワークショップ)およびフィールドワーク(まち歩き)を併用した形で展開した。委員会の時間は約2時間程度に設定した。日中に予定が入っているメンバーが多かったため、委員会は平日の夕方を定例とした。1人当たりの発言時間が長く、ほとんど時間内に終わることがなかった。かなり時間を延長したため、学生には少々つらかったかも知れない。この点については課題が残る。また、これまでのプロジェクト同様、場所は利便性の良い山科区役所内の会議室を利用することとなった。2007年の夏頃からはテーマ毎に分科会を設け、個別活動はその分科会毎にフィールドワークなどを行い、ワークショップで活動報告を行った。委員会全体の司会進行・意見調整はコーディネーター(筆者)が行い、行政委員はプログラムの作成、議事録の作成、関連資料の作成等事務局の役割を担当した。また、分科会にはリーダーを設定し、分科会の調整と報告を担当した。

毎回の事務局の調整会議と委員会(ワークショップ)等は以下のように開催された。なお、個別分科会については数が多くなるのでリストには入れていない。

〈2004年度〉

| | | | |
|--------|------------|--------|-------------------------|
| 10月21日 | 第1回事務局会議 | 02月18日 | 第7回事務局会議 |
| 10月28日 | 第2回事務局会議 | 02月21日 | 第6回ワークショップ |
| 11月11日 | 第3回事務局会議 | 03月06日 | まち歩き・交流会 (京の田舎民具資料館) |
| 11月19日 | 第1回ワークショップ | | |
| 12月01日 | 第4回事務局会議 | 03月11日 | 第8回事務局会議 |
| 12月16日 | 第2回ワークショップ | 03月15日 | 第7回ワークショップ |
| 01月12日 | 第3回ワークショップ | 03月22日 | 第9回事務局会議 |
| 01月21日 | 第5回事務局会議 | 03月25日 | 第8回ワークショップ |
| 01月25日 | 第4回ワークショップ | | 年度のまとめ |
| 02月03日 | 第6回事務局会議 | 03月29日 | 第10回事務局会議 |
| 02月07日 | 第5回ワークショップ | | |

〈2005年度〉

| | | | |
|--------|-----------|--------|-------------|
| 04月13日 | 第11回事務局会議 | 10月07日 | 第13回ワークショップ |
|--------|-----------|--------|-------------|

| | | | |
|--------|-------------|--------|-------------|
| 04月28日 | 第12回事務局会議 | 11月11日 | 第18回事務局会議 |
| 05月17日 | 第09回ワークショップ | 11月17日 | 第14回ワークショップ |
| 06月08日 | 第13回事務局会議 | 12月16日 | 第19回事務局会議 |
| 06月15日 | 第10回ワークショップ | 12月19日 | 第15回ワークショップ |
| 07月12日 | 第14回事務局会議 | 01月17日 | 第16回ワークショップ |
| 07月15日 | 第11回ワークショップ | 01月25日 | 第20回事務局会議 |
| 08月05日 | 山科学習会 | 01月27日 | 第17回ワークショップ |
| 08月19日 | 第15回事務局会議 | 02月07日 | 第21回事務局会議 |
| 09月09日 | 第16回事務局会議 | 02月10日 | 第18回ワークショップ |
| 09月13日 | 第12回ワークショップ | 02月24日 | 第19回ワークショップ |
| 09月28日 | 第17回事務局会議 | 03月12日 | 最終調整 |
| 10月06日 | まち歩き・交流会 | | |
| | (花山天文台) | | |

○対象とする写真資料について

古い写真といっても、その対象はかなり広い。加えて、写真というものは、一般的に個人的な記録として撮影することが多く、地域の記録として撮影されない。つまり、その多くは集合写真や観光での思い出であったりする。したがって、こちらの意図するような写真がどれだけ収集できるかは疑問であった。また、ではどのような写真を収集すべきなのかという指針なしに活動はできないので、一応下記のように収集写真の対象を設定した。

〈収集する写真〉

- ①撮 影 時 期 昭和初期から昭和30年代まで
- ②募集の対象 個人・地域団体・学校・事業所・行政機関など
- ③テ ー マ 家庭生活(衣・食・住)、行事・風習(年中行事・冠婚葬祭)、生業・産業(農業・伝統産業)、都市景観、自然、道路・交通、災害

2006年が山科区が誕生して30周年ということもあり、明治・大正期ほどの古い写真ではなく、高度経済成長以前と以後の比較ができるようにしたいという意図があった。公募および収集活動を通じて、合計で約800枚の写真を収集することができた。そのうちの約200枚を写真集に反映することができた。また、

これらの写真は全てデジタル保存され、将来的には公開できるよう作業を進めている。なお、現在と比較できそうな写真については、現地調査を行い、現状の写真も撮影し、写真集の中では昔と今を比較できるように構成を行っている。

（3）成果物の特色——思索プロセスとその成果——

○全体の構成（巻末の図1、2参照のこと）

収集された約800枚の写真をどのように構成していくのか、という点は非常に整理が難しかったといえる。というのも、地域や内容に偏りが多く、また1枚1枚を丁寧に観察していかなければよく分からないものも多かった。最初の活動では、そうした由来・履歴・場所の特定といった地道なフィールドワークが行われた。幸いにして、参加者が丁寧に調べ上げていき、場所や年代の特定をすることができた。

写真集の構成としては、大きく3つに分けている。最初に「大いなる町の発展とその変遷」として、町の今と昔を対比させ、またかつてあった建物を写真により復活をさせている。次に「山科盆地を歩いてみよう」として、エリア別の写真を新旧で対比させ、写真集を見る人の地域が昔どのような姿であったかを知らしめている。地域は5つのブロックに分けている。そして、最後は「懐かしアルバム」と称して、「昔のくらし」「昔の生業」「昔の乗り物」というテーマで分け、写真資料を分類しレイアウトを行った。そして巻末には「年表」と「山科の地図」を付け、記述内容と見比べることができるよう配慮を行った。また、写真キャプションについても各パートの担当者が調査データを踏まえつつ、思い思いの原稿を作成した後、全員で校正をした。そのことによって、ぬくもりのある文章を演出している。

写真集の規格としては、家庭で見えることを前提に、冊子形式はA4版（見開きA3）とし、予算の関係から全頁モノクロ（42頁）、表紙のみカラーとした。それでも印刷部数は1000部であり、頁数と部数の検討だけでも相当な議論を要した。つまり、頁数が決定できないと編集活動ができないため、区役所側には予算見積もりも参加者に提示することが必要となり、逆に全員で予算調整できたことが、連帯感を強めたように感じる。

また、写真集発行後、すぐに在庫が無くなることが予想されたため、前回の

プロジェクト同様、区役所のホームページから写真をダウンロードできるシステムを作成した。⁶⁾

表紙とタイトルについては、いくつかの案が出されたが、最終的に編集担当者の制作したデザイン案とタイトルに決定した。

また、編集後記には、企画・制作に携わった参加者のコメントを見開き2頁を使って掲載した。公募区民委員や学生たちが、どのような思いで形にしたのかという、思い思いのコメントが入り、この写真集を見る人に伝わると同時に、市民参加型事業としての成果という側面を少しでも理解してもらうことを意図している。

3. プロジェクトおよび成果物の評価

(1) 内部評価——委員による活動および成果の評価——

2006年の4月に写真集の印刷が完了し、4月12日に参加メンバーによる反省会を行った。以下には、その時出された参加者によるプロジェクトの評価内容を紹介するとともに、筆者なりのコメントを付した。

〈委員会活動について〉

最も多かった内部意見は「もっと時間をかけて作りたかった」「もう少し余裕を持って現在の姿を写し込みたかった」など、時間的な課題についてであった。「途中で区役所の担当者が総入れ替えになったことが問題だった」という指摘もあるように、2005年の春から夏にかけての期間に、人事異動のことも考慮に入れながらの活動推進は、どうしても中途半端にならざるをえず、参加者に迷惑をかけてしまった。それに加えて、時間的なロスを生じさせた。そして、結果的には組織的なメンバー交代ということが、意思統一という面でもデメリットを生じさせてしまい、後半の活動に負担が集中せざるを得なくなった。時間的な問題だけでなく、組織の信頼性などの課題も生じることとなり、まちづくり事業における異動のあり方については今後の大きな課題として残ることとなった。

また、「班別活動がこじんまりとしていて、作業の大詰めになると少人数になってしまい、十分にみんなの意見が反映できなかった」「ワークショップで

学生がもう少し意見を言えるようにした方が良かった」とあるように、参加者のモチベーションの違いがもたらした課題もあった。とくに、発言力の強いメンバーと、学生のように地域のことも十分分からずついていくのが精一杯というメンバーがいる中で、お互いがワークショップの意味から理解していくという活動であったため、コーディネーターとしても学生の意見を十分引き出すことができなかった。チームを形成する中で、1人ひとりの意見を引き出す時間をもう少し持つべきであったと感じる。ただ、「ワークショップの意見発表の際、頭の中では色々アイデアがあるのに、発言するとなるとほとんど言うことができず、自分で反省…」「普通に学生生活を過ごしていたら、きっと関わらなかったであろう機会に参加したことが、今の自分から見ても驚き」など、学生自身の葛藤や参加の意味を表現する意見もみられた。また、「活動を通じてメンバーの和が培われ、とてもいい雰囲気で最後の仕上げができたと思います。このメンバーのパワーはすごい!」「山科の歴史等について全く知識がなかったが、メンバーのみなさんに教えられる事が多く、とても感謝しています」など、活動に参加することで得られた価値についても評価する意見があり、コーディネーターとしては多少救われる感じもあった。

プロジェクトは、2006年4月12日をもって解散ということになったが、今後についての意見も出された。「新たな活動への展開が課題」「今回写真集に載せた写真の定点観測を、これからもやっていきたい」「本当に楽しいボランティアでした。だれもが何かに役立ちたいと考えています。そんな良い機会があればまた…」「山科の近代を中心にして〈山科学〉ともいえるべき総合的な視点で取り組むのにも興味がある」など、今後の展開に関する具体的な方針もあり、これがまちづくりNPO「山科を語りつくす会」の結成へと結びつくことになるのである(終章参照のこと)。

〈成果物について〉

・表紙・体裁・紙について

まず、表紙については、「表紙のデザインがシックで、色もよかった」とあるように、いくつかの案の中でメンバーの意向で決めていくプロセスで印象に残るものとなる。これまでのプロジェクトでもそうであるが、最終的な印刷見本段階でもチェックを行うことの有用性を感じている。

次に体裁についてであるが、「大きいと持ち歩きにくいので、写真集のポケットサイズ版がほしい」という意見があった。委員会の中ではこのような意見は出されなかったのであるが、あえて最後にこうした意見があることは注目しておきたい。ただ、大きさが小さくなれば入れる写真の数も少なくなり、大きさにも制限が増すため、持ち歩くための写真集の意味から考える必要があろう。

そして、紙質のことについては、「紙がペラペラで質が悪いので、もう少し良いものが良かった」という意見が出された。確かに、紙質的には写真の裏写りのしない最低ランクの紙を使用せざるを得なかった。部数と頁数を確保するためには仕方の無いことであったが、一方で「写真集はカラーの方がよかった」「1000部では少ない」という意見を考え合わせると、全体的な制作費自体があまりに少ないという根本的な問題は当初からあり、地域連携事業そのものへのモチベーションを高める意味でも、事業予算のあり方については、行政全体できちんと検討しておくことが求められよう。

・編集・レイアウトについて

写真集の編集・レイアウトについては「800枚以上の写真が集まり、選び抜かれた200枚以上の写真で構成された各ページは密度も濃く、すばらしい」「うまくレイアウトされている」とあるように、班毎に綿密な意見交換をした成果が現れている。それに加えて、今プロジェクトでは編集実務経験者がプロジェクトに参加していたことが何よりも大きく、レイアウトデザインに注ぐエネルギーは、これまでのプロジェクトの中で最大であった。

一方、「写真の大きさをもう少し大きくしたかった」という意見もあり、確かに効果的にレイアウトはできているが、一つひとつの写真は小さく掲載されてしまうので、写真集としては見づらい部分も少なくない。予算的な問題も大きい、その対応として「資料編」の編集や写真データベースづくり、あるいは写真展の開催など、可能な範囲での補完活動を行っている(終章参照のこと)。

・記載内容について

写真集に記載した情報内容については、「昔の風景は載っているが、今ある山科のことをあまり載せられなかったのもう少し特徴を載せた方が良かった」「大蛇伝説の様に、今も続いている信仰や行事が山科にもっとあってもよかったのではないだろうか」「インタビューに行って聞いたことを、もっと伝

えたかった」など、削り落とした部分に関する意見が多く、これも後の資料編やNPO活動へと繋がっていくこととなる。

また、「学生のアイデアや発想というのが、本の構成の非常に大事なkeyになったと思います。若いってすばらしい!」という意見もあり、コーディネーターが意図した「多様な視点」の反映についてもある意味成果を収めていることが伺える。

・成果物の利用について

写真集の今後の利用については、「写真集がたくさんの人に見てもらえて、山科のこれからのまちづくりに興味を持つ人が増えればいいと思います」「地域の方々の協力があって出来たもので、次の世代につなげる共有財産として活用して欲しい」「写真集が今後どれだけまちづくりに活かされるかわからないが、夢を託したい」などの意見が出され、写真集が単なる過去の記録としてではなく、これからのまちづくりのベースになるという意識を参加者が強く持っていることが理解できる。

・その他

写真集について「役所が作った冊子としては、すばらしい一言に尽きる。このようなオリジナル作品は珍しいと思います」という感想が出されているが、この言葉の逆を考えると、役所が作るものの質に少なからず問題があることが伺える。市民参画事業を行うことで、同じ予算でも質の高い成果を出すことができるというモデルになればと願う次第である。

(2) 外部評価

写真集の配布と同時に、成果物の外部(利用者)評価を目的として、木下研究室が中心となってアンケートによる調査を可能な範囲で実施した。アンケートは、主に山科区役所の窓口へ地図を求めに来た人を対象とした調査を行った。アンケート内容は、「性別」「年齢層」「山科区との関わり」「地図の印象」を聞く比較的簡素な内容にし、その他自由記述欄を付した。なお、印刷部数が少なかった関係により、これまでのプロジェクトのように大学内で調査を実施することはできなかった。以下に、その調査方法とその結果を示したい。

〈一般評価——主に山科区役所に訪れた利用者による成果評価——〉

・調査方法

アンケートは官製葉書を使用した。原則的には山科区役所において地図配布時にアンケートも一緒に手渡し、後日利用者が記入し投函してもらう方法をとった。ただし、区役所に電話連絡にて写真集を郵送希望をする人に対してもアンケートの同封を行った。調査期間としては、区役所にて地図の一般配布が開始された、平成18年4月からアンケート配布をスタートし、回収については平成19年3月までに回収された葉書までを有効とした。

・調査結果

[回収率]

アンケートの配布は1000行い、返送件数が152(有効回答件も同数)であった。アンケート総数に対する有効回答件数の割合は15.2%であり、「山科ガイドマップ・My やましな」の23%、「やましなホップ・ステップ・マップ」の9.6%と比較すると、丁度中間的な結果となっている。

[男女比]

男性が110、女性が42であり、男女比の比率は男性が女性の2倍以上を占めている。

[年齢構成]

年齢構成については、20歳未満が0、20歳以上30歳未満が1、30歳以上40歳未満が7、40歳以上50歳未満が12、50歳以上60歳未満が27、60歳以上が105であった。60歳以上が全体の約7割以上を占めており、高い年齢層からの回答が大部分を占めている。

[区内在住年数]

年数の低い順に、5年未満が1、5年以上10年未満が7、10年以上30年未満が21、30年以上50年未満が59、50年以上が49、その他(区外在住者、区内在住〈学〉者など)が15となっている。5年未満の回答が全体の約0.65%、5年以上10年未満の回答数を加えた場合でも5%に達していない。一方、50年以上在住している人の割合は全体の約32%であり、30年以上50年未満の数を加えると約7割を占めるに至っている。つまり、毎回のことであるが、回答者の大半は、山科区内に長く在住している人の割合が非常に高くなっている。

[印象評価・自由記述]

地図を見た印象に関しては、「良い」「まあ良い」「あまり良くない」「悪い」という4段階の評価設定を行った。その結果、「良い」と回答した人が119で全体の約78%であり、「まあ良い」と回答した人は24となっている。「良い」と「まあ良い」を合わせたプラス評価は全体の約94%を占めている。また、「あまり良くない」と回答した人は4で全体の約3%であり。「悪い」は0であった。なお、チェックなしは5(3%)であった。今回の写真集も、これまでの「山科ガイドマップ・My やましな」および「やましなホップ・ステップ・マップ」同様高く評価されていることを伺い知ることができる。また、「良い」と回答した人の内、わざわざ「非常に良い」と選択肢を追加する例もみられた。

次に、評価理由および自由記述に関して、その概要について以下に示す。

まず、全体的なプラス評価としては、「写真でわかりやすく紹介されている」「今と昔を対比して理解することができる」といった視認性に対する意見と、「山科の昔の様子が写真で見事に紹介されていて大変感動した」「自分の若かりし頃の風景に出会えて嬉しくなりました」「昔なつかしい気持ちになり、子ども時代を思い出しました」「人生の縮図を見ているようです」といった記述が多く見られ、回答者には長年山科に在住の人が多数を占めていることもあり、自分史と照らし合わせて昔を想起・回想する内容が多々見られた。そこから発展して「大切にしたい」「家宝にします」とまで書かれている。中には葉書の紙面全面を使って過去の回想を記述している回答者も数多く見られた。とくに単なる回想を意図した成果物としてこの写真集の企画・制作を行っていたわけではないが、こうした点から利用者の多くに強く回想的効果をもたらしている成果であることを伺い知ることができる。また、「この写真の場所を探して歩いてみたい」など行動を誘発する内容も見られたほか、「第2集を期待します」という続編への期待も少なくなかった。その他、少数意見としては、「表紙がよい」「モノクロにしてよかった」「文字の大きさが丁度良い」「商品価値有」「山科をさらに好きにしてくれました」「子どもに伝えてきたい」「京都橘大学が好きになりました」「山科に住んでいる人々の絆を深めるのに役立つ」(各1件)などがあげられる。ただし、写真資料の情報提供に結びついたり、今後のまちづくりに関係するような具体的な記述は皆無であった。

一方、マイナス評価としては、「写真を大きくして欲しい」（7件）、「レイアウトが見にくい（4件）」、「カラーが良かった（2件）」といった意見があり、この点は制作側が予算と掲載写真の数、それに情報量との兼ね合いを熟考した結果としての成果であるため、こうした意見が出てくるのはある意味自己評価の結果とも同調し、予想することができよう。その他、とくに多かったのは特定の場所に関する写真が無かったことへの悔やみであり、だが一方で写真提供については情報記載はみられなかった。また、マイナス評価の少数意見としては、「写真に東西南北を示して欲しい」、「地名の説明がほしかった」「写真グレーのバック地に解説の細い文字が読みづらかった」（各1件）という意見もあった。なお、これはマイナス評価というよりも感想・所感に近い内容であるが、「私達は便利になりました」「山科のというよりは日本が失った自体を見た気がしました」「これが発展であるのか、破壊である」など、将来に対する危惧に関する意見も寄せられ、今後のまちづくりを考える上での参考となろう。

また、提案的な意見として最も多かったのが、「有料配布にして区民の手に渡るようにしてほしい」ということであつた。部数が1000部とその後緊急的に増刷はしたものの1人1冊ということで、十分に配布することができなかった。当然コーディネートを担当した筆者自身も学会のまちづくり関係者に配布するのみで、学生にこの写真集を全く配布できなかったことは非常に残念であつた。有料化についても「300円」「500円」（各1件）と具体的な数値を明示している回答もあつた。自治体としては外部費用を入金するシステムが今のところないため、現状では無理であるが、組織のあり方とともに今後の区役所改革の1つの課題となればと願うところである。その他の提案として、「資料編を公開してほしい」「インタビュー集を作成してほしい」「昔を知る人の生の声を聞く機会を設けてほしい」「写真はデジタル保存してほしい」（各1件）といった意見があり、これらは次章にも少し触れているように、写真カードのデジタル化、資料集の発行、山科を語りつぐ会の発足に引き継がれている。

4. おわりに——アウターセクターを考える——

「パッチリ山科見つけ隊」の活動は、『写真集 モノクロームヤマシナ——未

来へつなく山科の記憶——⁷⁾』で完了ではない。その後、有志が中心となって、参考文献と写真集に掲載できなかった写真や資料およびエピソードを加えた『写真集 モノクロームヤマシナ ～未来へつなく山科の記憶～ 資料編』の編集・発行⁸⁾と、800枚に及ぶ写真カードのデジタル化の活動がある。そして、こうした写真収集・保存・編集活動が、2006年の山科区誕生30周年記念誌『古今相照』の下敷きとなっていくのである。¹⁰⁾その後、2006年10月に行われた山科区誕生30周年記念式典が終わってすぐに、パッチリ山科見つけ隊の有志が中心となって「山科を語りつく会」の発足が決定し、2007年より本格的にパッチリ山科見つけ隊の継続的な活用や地域のエピソードを掘り起こす活動をスタートさせるに至っている。他方、大学としても2005年度より3ヵ年、文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)に採択され、山科地域をフィールドとした大学生の教育プログラムを、まちづくりを手がける教員を中心として新たな展開を始めた。¹¹⁾現代GPにおける地域資源再評価プロジェクトとしては、写真データを活用した、「展示ツールの開発」(2005年度)、「展示ツールを利用した展示会の開催」(2006～2007年度)、「現状資源の発掘」および「将来資源の創出」(2006年度)、地域資源を紹介する「山科ガイドブック」(仮称)の企画・編集・発行(2007年度)へと発展している。

さて、今回を含む過去3回、5年にわたる山科区における連携事業を展開してきたわけであるが、上記のように地域資源に関してだけでも、非常に大きな広がりを見せてきている。と同時に、評価アンケート結果からみても、住民参加によるきめ細かなプロジェクトがいかに高い成果を生みだしているかも証明できているものと考えられる。それを可能とする要素も筆者なりに見えてきたので、それを以下にまとめて終わりとしたい。

ともかく、市民参加型事業というのは、非常に手間と時間がかかるものである。しかも、われわれはプロジェクトの企画段階から制作段階まで一貫して市民参加を行うため、調整という面で多くの労力を要する。しかしながら、効果的な予算の執行を考える上で、行政サービスの向上・発展を目指すには、サービスの受け手が事業に参加することなくしてはありえない。これまで、自己完結していたプロジェクトに、外部的な視点、いわば「アウトセクター」の関与が将来的には一般化していくのではないかと予測する。それも一時的な関与

ではなく、ランダムになるが以下のような要素が必要かと考える。①プロジェクトの最初から最後までに関与、②サービスのターゲットに近い人材、③属性のばらつきがないこと、④ワークショップに適した人数、⑤大学や専門家など外部人材(第3者の視点)の必要、⑥同じ目線に立って議論ができる環境があること、⑦予算処置についてもきちんと説明ができること、⑧信頼関係の構築ができること、である。とくに最後の「信頼関係」がなければ、市民参加事業は推進するどころか、敵対することとなる。形成された組織の人員属性によって成果も左右されるという特徴はあるが、この先、自治体のみですべてのプロジェクトを推進するという時代でないのははっきりしている。であれば、こうした取組を早く、効率的にシステム化していくことがこれからの自治体連携事業には必要になってくるだろう。それが、将来的に効率化することに繋がり、本来の意味での民主的な自治が誕生してくるのではないだろうか。

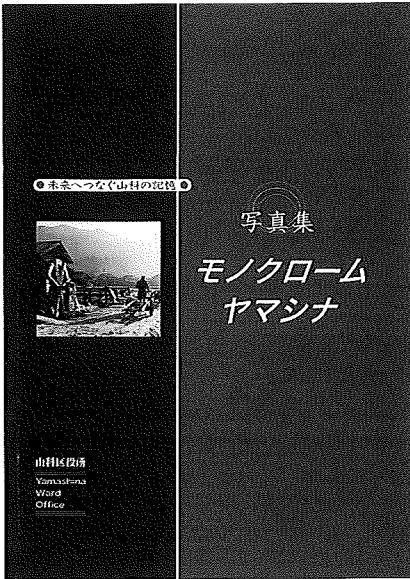
最後に、「パッチリ山科見つけ隊」を暖かくそして時には厳しく支えていただいた委員のみなさま、区長をはじめとする山科区職員のみなさま、アンケートにご回答いただいたみなさま、そして関係された大学教職員のみなさまに対して、この場をかりて厚く感謝の意を表したい。

注

- 1) 木下達文「視覚情報メディアとしての『地図』——『京都市山科区ガイドマップ』における市民参加型企画・制作システムとその効果——」、『京都橘女子大学研究紀要 第29号』所収、2003。現物としては、やましなマップづくり委員会企画監修『山科区ガイドマップ My やましな』山科区役所、2002を参照のこと。
- 2) 木下達文「視覚情報メディアとしての『地図』(2)——『Let's Walk やましな ホップ・ステップ・マップ』企画・制作における市民参加型地域資源再評価活動とその効果——」、『京都橘大学研究紀要 第32号』所収、2006。現物としては、やましな“新”宝もの見つけ隊企画監修『Let's Walk やましな ホップ・ステップ・マップ』山科区役所、2004を参照のこと。
- 3) 織田直文・木下達文編『文化開発の可能性——コラボレートする山科からの提案——』京都橘女子大学文化政策ライブラリー02、晃洋書房、2004。この中の第1章第1節「山科の概況と地域振興について」と、第2章第2節「市民ボランティアによる地域資源の再評価」に、2001年度から2002年度までの経過概要について触れている。

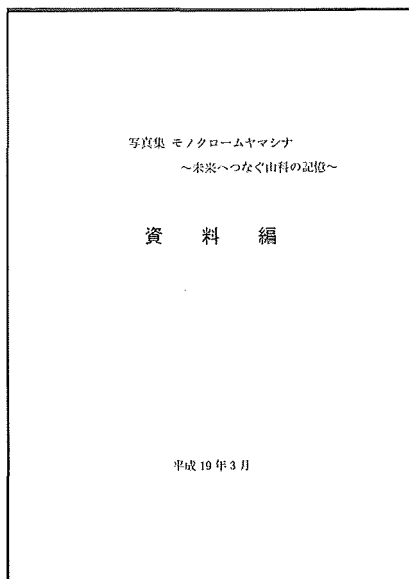
- 4) 「GDS モデル」とは、市民参加型事業の中でも、企画段階から制作段階まで一貫して市民(Shimin)が行政事業(Gyousei)に関わり、大学(Daigaku)がその仲立ちを務めるというシステムのことで、筆者が命名している。
- 5) 木下達文編『「写真で語る山科の今・昔(仮称)」制作のための企画・調査等研究報告書』京都橘女子大学、2005、pp.5-7。なお、2005年度のプロジェクト報告については、木下達文編『「写真で語る山科の今・昔(仮称)」制作のための企画・調査等研究報告書』京都橘大学、2006にまとめを行っている。事業詳細については、ほぼこの2報告書に網羅されている。
- 6) 山科区役所のホームページから写真集の全頁をプリンターで印字して利用できるようになっている。データはPDF形式で作成しているため、閲覧するためには無料の専用ソフト(Acrobat Reader)をダウンロードして使用する必要がある。
<http://www.city.kyoto.jp/yamasina/mono/mono.htm> (「山科区役所・「写真集 モノクロームヤマシナ——未来へつなぐ山科の記憶——」、閲覧日：2007年9月20日)
- 7) パッチリ山科みつけ隊企画監修『写真集 モノクロームヤマシナ——未来へつなぐ山科の記憶——』山科区役所、2006
- 8) パッチリ山科みつけ隊企画監修『写真集 モノクロームヤマシナ——未来へつなぐ山科の記憶——資料編』パッチリ山科みつけ隊、2007
- 9) デジタル化の作業が現在も継続中である。
- 10) ふれあい“やましな”実行委員会編『山科区誕生30周年 古今相照——写真でつづるやましな——』ふれあい“やましな”実行委員会、2006
- 11) 現代GPに関する詳細については、これまでに以下の2報告書にまとめられているので、そちらを参照していただきたい。
 織田直文編『平成16年度 文部科学省採択 現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)「臨地まちづくり」による地域活性化の取組 平成17年度 成果報告書』京都橘大学、2006
 織田直文編『平成16年度 文部科学省採択 現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)「臨地まちづくり」による地域活性化の取組 平成18年度 成果報告書』京都橘大学、2007

1. 『写真集 モノクロームヤマシナ——未来へつなぐ山科の記憶——』表紙

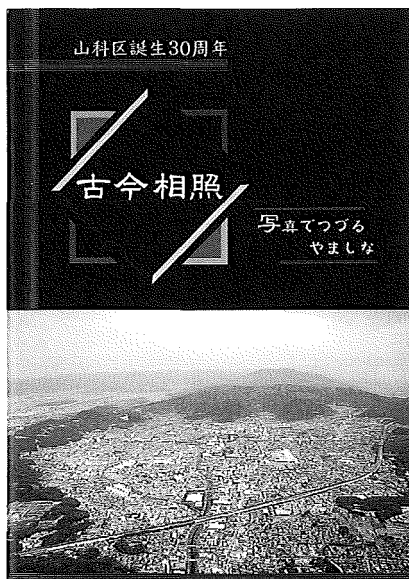


2. 『写真集 モノクロームヤマシナ——未来へつなぐ山科の記憶——』内容





3. 『写真集 モノクロームヤマシナ——未来へつなぐ山科の記憶——資料編』表紙



4. 『山科区誕生30周年 古今相照——写真でつづるやましな——』表紙